〜〜

対面リーディング通信

2014年 2月

２０１４年２月1日 発行　　第１５３号（隔月刊）

〜〜

今年もよろしくお願いします

2013年には150号を迎えた本通信。2014年も継続できるよう、また日々対面サービスの質向上を目指し、頑張ります。

本年も変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。　（谷口）

異動してからもうすく3年。3名で分担しているので、やっと1年分の経験といえるでしょうか。

「2年目」は細かい部分への気配りもできるようになりたいと思います。

（木田）

今年は午年。草をはむ草食動物の優しさと、野山を駆ける力強さ、そして羽を持った馬（ペガサス）のように大空を飛べる自由さ兼ね備えた、そんな対面リーディングになるといいなぁ。（木村）

今月号の主な内容

対面リーディング難所物語	群像の書評欄の音訳を拝聴して（その２）	二村　晃	2
私のふるさと	生駒の向こう側	木田　陽子	3
誌上勉強会	図表の読み方　２	木村　謹治	4
寄り道・回り道	江戸堀　木田	木村　謹治	8
人と人生	青木陽子	木村　謹治	9

79．『群像』書評欄の音訳を拝聴して（その2）

二村　晃（ふたむら　あきら）

新年おめでとうございます。今年の干支（えと）は甲午（コウゴ・キノエウマ）です。十干（じっかん）が最初の甲で、十二支が後半の始まり、時計でいえば午後0時の正午を示す午です。だから、何事もトップに立って進めるという縁起のよい年なのです。いかがでしょうか？奔馬（ほんば）のように、勢いよく走り出してみませんか。

先般、新年最初の対面読書の席上で年賀状が話題になり、この干支の読み方を尋ねられました。この機会にその読み方について解説しておきましょう。十干とは、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の十文字です。この十文字が「木・火・土・金・水」の組の順番に、二文字ずつ兄弟になって、兄は「え」、弟は「と」と読まれるのです。

「甲」は、木の組の兄ですから「キノエ」。「乙」は、木の組の弟ですから「キノト」と読むのです。「丙」は「ヒノエ」、「丁」は「ヒノト」、戊」は「ツチノエ」、「己」は「ツチノト」、次の「庚」は「カノエ」、「辛」は「カノト」、「壬」は「ミズノエ」、「癸」は「ミズノト」と読むのです。おわかり頂けるでしょうか？　この干支（エト）を音読みにして、「戊辰（ボシン」の戦（イクサ）とか、「辛亥（シンガイ」）革命とか、「壬申（ジンシン）の乱と読むのは、歴史書でもお馴染みですね。

さて、今回も前号に続いて、『群像』の書評欄の音訳テープを題材にさせて頂きます。

10月号です。「イトウヒロミ著‥イトウヒロブミのイトウ、ヒロミのヒはクラベルのヒ、ロはロレツがまわらないのロ、ミはうつくしい」で、伊藤はいいのですが、「ロレツ」で困りました。漢字が直ぐに浮かばないのです。辞書を見てもらい、「呂律」と理解したのですが、それなら、「フロのロ」と言ってほしかったですよ。ＡＯＫは、３字熟語にして「フロシキのロ」と言っています。漢字を説明する時は、簡単な言葉を選んで下さいね。「イヌゴコロ‥イヌネコのイヌとココロ」で、伊藤比呂美著『犬心』と理解しました。

内容は、「共に暮らしている犬の容赦ない老いが逐一語られるにも拘わらず、少しも陰鬱でないのは、伊藤比呂美の命の正体を覗き込むような率直さと、具体性のある生き生きとした叙述の故だろう」と語られています。愛犬の最晩年が描かれるのと併行して、著者の父の最晩年が描かれる」とあります。悲しいですねぇ。

もう一つ。「オガワケイ著、ギンイロノツキ・オガワクニオとのヒビ‥本書は2008年にこの世を去ったオガワクニオの夫人、オガワケイによる随想集だ。半世紀にわたって共に暮らした日々を回想する」とありますが、これでは「オガワクニオ・ケイ」夫妻の名前の漢字がわかりません。ここで引っかかると、書かれている書評の内容までも頭に入らなくなってしまいます。固有名詞だけは、文字がわからないとニッチもサッチもいきません。添えられているコピーを見てもらい、「小川国夫・恵」夫妻と理解できて、胸のつかえが取れました。些細なことですが、注釈をよろしくお願いしますね。　〈つづく〉

［注］ＡＯＫ：視覚障害者用パソコンソフト

生駒の向こう側

サービス部図書・情報サービス係　木田（きだ） 陽子（ようこ）

冬になると「奈良は雪、大丈夫やった？」とよく尋ねられます。確かに私の住む奈良市は、大阪から見れば生駒山の向こう側。ところが雪雲は山上でほとんどの雪を降らせ、こちらにやってくるのは冷たい風だけ。積雪は２月中に１度あるかないかのこと。雪だけでなくテレビ大阪の電波もシャットアウト。転校生が話す聞いたこともない番組に憧れたこともありましたっけ。

南北に長い奈良県の一番北、靴下に例えれば足を入れる口のあたりに奈良市があります（余談ですが、県内の広陵町（こうりょうちょう）は靴下の生産が盛んです）。幼稚園から高校までずっと市内の学校に通っていましたが、高円山（たかまとやま）、三笠（御蓋（みかさ））山、生駒山、どの校歌にも必ず奈良盆地を囲む山の名前が詠み込まれていました。

内陸県ですから、日常的に海を見る機会がありません。遠足で天保山まで行った時など、生徒みんなが「海やーっ！」と電車の窓に群がって大はしゃぎ…と、これは私たちだけが特殊なのかもしれませんね。実は土佐堀川を眺めていると、海が近いのを感じられてちょっと楽しくなってきます。

反対に見慣れているのは「古いもの」でしょうか。塾の窓から見えた森は古墳（開化天皇陵）。市立図書館からは興福寺の五重塔が見えます。近鉄電車も平城宮跡を横切って難波へと向かいます。今でこそ線路の両脇に復元された朱雀門と太極殿が建っていますが、「平城遷都 1300 年祭」以前の平城宮跡は大部分が草原。何度か外遊びの道具を持って訪れたものです。数年前のテレビドラマでは朱雀門の正面に学校がある設定になっており、思わず「そこは線路や！」とツッコみました。

毎年１２月１７日は「春日若宮おん祭」。正午からは特に華やかな「お渡り式」があります。神様に芸事を奉納する人々が伝統衣装に身を包み、登大路（のぼりおおじ）と三条通り（近鉄奈良駅からJR奈良駅までの区間のあたり）を練り歩きます。市内の小中学校は２時間目で授業を切り上げ、給食（メインはおん祭の伝統料理「奈良のっぺ」）を食べて下校。伝統行事に参加するための措置ですが、きっと子供たちのお目当ては今も昔も沿道に出る屋台の方でしょう。去年は偶然お渡りを路線バスから眺めることが出来ました。非常に短い時間ですが、意外と穴場かもしれません。

奈良のっぺ

伝統料理といえば「きなこ雑煮」。アルバイト先で「お雑煮からお餅を出して、小皿のきなこを付けてお召し上がりください」と説明して遠方からのお客さんが驚く顔を楽しむ一方、バイト同士の会話では「そんな食べ方したことないねんなあ…」と顔を見合わせている情けなさ。

昔から「（東大寺二月堂の）『お水取り』が終わらないと春が来ない」と言います。４月になれば平城宮跡や佐保川（さほがわ）沿いの桜並木がきれいに咲き揃います。奈良市の花は桜（ナラノヤエザクラ）。春まであともう少し。

木村（きむら） 謹治（きんじ）

図表の読み方 2

― 形を説明するか内容を説明するか ―

この原稿を書くにあたって、考えれば考えるほど、図表の読みの難しさに驚かされます。

簡潔でいて、しかも上手に伝える事は至難の業です。短い時間に初見で読まなければならない制約の中では何かが犠牲になりがちです。

とは言え、複数のパターンをおぼえることにより説明の質が向上するものと思われます。

前回も書きましたが、ここに例示するものは数多くある読みの中のほんの一例です。また、完璧なものではありません。

グラフは単独で存在するものでもなく本文との関係が重要です。今回は本文とは切り離し純粋にグラフの読みについて検討していきます。

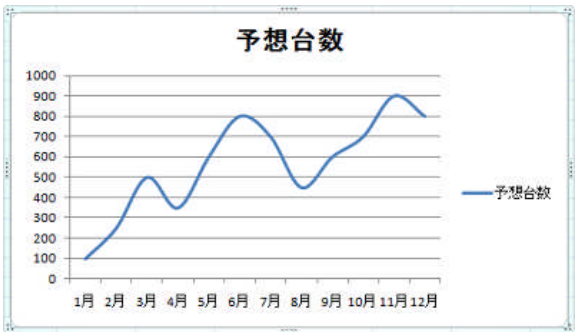
このシリーズの目的は、たくさんの事例を知ることにより、今読んでいる図書に相応しい読みを選択する一助となること。

また、読み方を提起することにより、活発な意見交換ができることを期待しています。

皆さまの、ご意見・感想をお待ちしています。

折れ線グラフ

下記のグラフを初見で読んで下さい。単純なグラフなので複数の方にお聞きしてもそんなに差異はないと思います。



標題・単位（縦軸・横軸）・出典などを読むのは基本です。

さて、前回は「おおよその数字」を読み上げるという事でした。この方法で間違いはありませんが、本文の内容如何によって、グラフの形を説明する方が相応しい場合もあります。

左のグラフは８月を頂点に山形の弧を描いています。右のグラフは増減を繰り返しながら右肩上がりになっています。

例えば左のグラフでは１月・８月・12月の数値と形を読む方法です。具体的には『１月の７度から気温が上がり、８月の２７度をピークに１２月の９度まで下がっています。８月を頂点とした山のような形になっています』

録音図書と違い、利用者が目の前におられます。『各月の気温を読みましょうか?』など必要か否かを聞く事により処理を速めることができます。

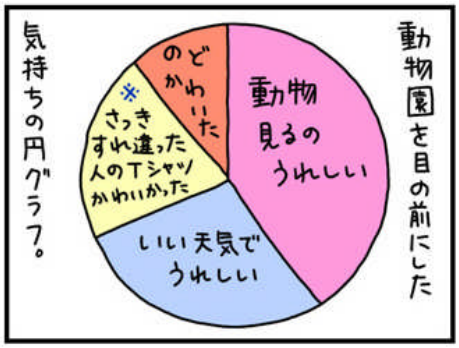
では右のグラフはどう読めばいいのでしょうか。『１月の１００台から１２月の８００台まで増減を繰り返しながら全体として増加しています』とは説明できます。

もう少し詳しく、それぞれのピークを説明する方法もありますが、このグラフの場合はピークが多いので省略できるのは「２・５・７・９・１０月」しか無く、半分にもなりません。

ここで根本的な命題ですが、皆さんは12個の数字を記憶することができるでしょうか。私は無理です。読み手はグラフを見ているので理解できた気になりますが、数値だけを聞いても頭の中で展開するのが困難と思う人が大多数では無いでしょうか。ここにグラフを読む難しさがあります。

以上を踏まえて右のグラフの読みを考えてみて下さい。試行錯誤しながら考えることが図表を読む事の上達への近道と思います。いいアイデアが浮かべば投稿して下さい。次号で発表します。

円グラフ



円グラフは構成比を表すことを目的としたグラフです。

ですが左の図のように、％や数値が入っていないグラフもよく見かけます。分度器を持ち歩いているにとは皆無でしょう。また、角度がわかっても計算式は出てきますか。

「分度器で測った角度／３６０×１００」がパーセントです。読みながらこの作業は無理ですね。このグラフの場合は大雑把に説明するしかないでしょう。

基本的には面積が多い方から読むのが一般的です。

「のどがかわいた」と「動物見るのうれしい」で５０％、他の２つの合計が５０％ですね。「いい天気で…」はその半分より少し多めなので２５％強、「さっきすれ違った…」は２５％より少なめはわかりました。

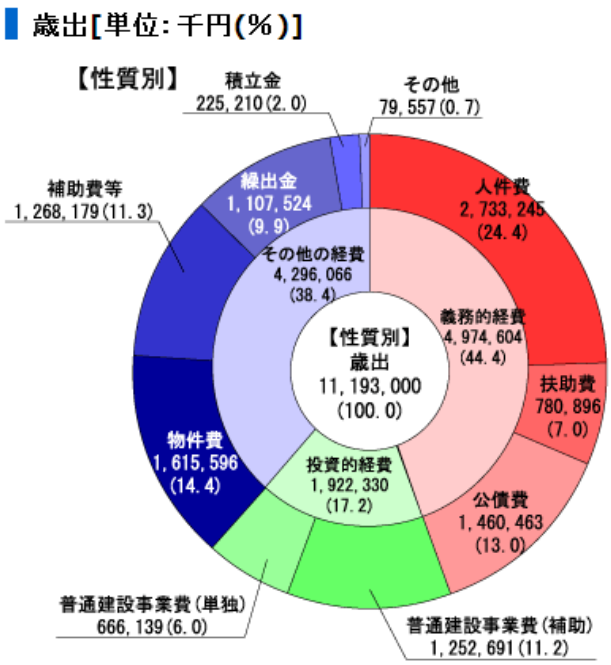
では「動物見るの…」はどれくらいでしょう。「のどがかわいた」と「動物見るのうれしい」の合計で５０％なので、その中の「のどがかわいた」は１／５（１０％）強のように見えます。従って「動物見るのうれしい」は４０％弱となります。

一見しておおよそのパーセントが分かる人は別として、描かれている中からヒントを得ながら考えて行くしかありません。

円を十字に区切ると、一区切りは２５％、更にその半分はおおよそ１２～１３％です。おおよその目安を憶えておくと便利です。

さて、実際の読みはいかがしましょう。『動物園を目の前にした気持ちで「動物見るのうれしい」が１番多くて、おおよそ４０％強、次に「いい天気でうれしい」が２５％強・・・』ですかね。

蛇足ですが、読みは会話調でも大丈夫です。『今から「動物園を目の前にした気持ちの円グラフ」を読みますね』『数値が入っていないので目分量で読みますね』『４種類の気持ちが書かれています』『１番多いのは・・・』と。



少し複雑になって来ましたね。

５ページのグラフとの違いは単位と%が入っている分、処理は簡単かも知れません。

複雑にしているのは、同心円が2重になっていることです。

内側の円周の詳細が外側の円周となっています。皆さんはどう読まれますか？

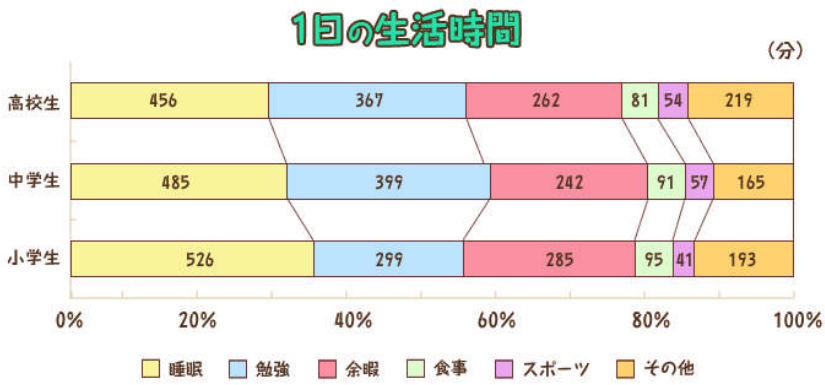
一つの方法は内周の３項目を先に読み、各項目の内訳を次に読む方法です。

数値があれば「積み上げ棒グラフ」でも表すことができますが、円グラフにした作家の意図は、一見して割合がわかることに主眼を置いたと想像できます。

帯グラフ

このグラフのように単独（この場合は円グラフと同じです）で用いられることもありますが、多くの場合は数本並べて書きます。

帯グラフは項目ごとの構成比率を比較するのに便利だからです。



左の図では小中高の生活時間の割合を示すと共に、構成比の比較もしています。

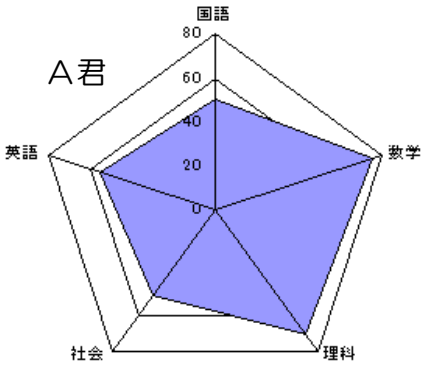
『小学生、睡眠５２６分、勉強２９９分・・・』『中学生、睡眠４８５分、勉強３９９分・・・』と読むと、睡眠時間が学年（年齢）が上がるにつれて少なくなっていることを伝える力が弱くなってしまいます。

反対に『睡眠、小学生５２６分、中学生４８５分、高校生４５６分・・・』と読むと各学年別の構成比がわかりにくくなります。

長くてもよければいくらでも説明がつきますが、簡潔に伝えるのは難しいです。グラフの利点は複数の表現を一つのグラフにまとめることにあります。従って一つの切り口で表現しようとするのは無理があります。だからと言って、長々と説明するのも困りものです。

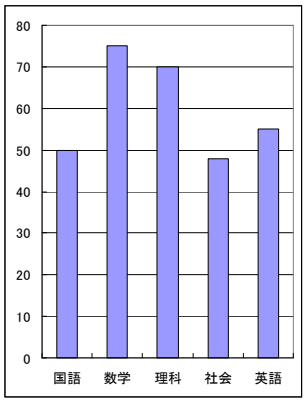
結論としては上記の2種類のうち、どちらが本文に近い説明かで判断するしかありません。利用者が詳しく読んでほしいと希望すれば別ですが。

レーダーチャート



レーダーチャートは、複数のデータ（指標）を一つのグラフに表示することにより、全体の傾向をつかむのに用いられるグラフです。

左のグラフは理数には強いが文化系には弱いことが数値からもグラフを見た感じからも読み取れます。

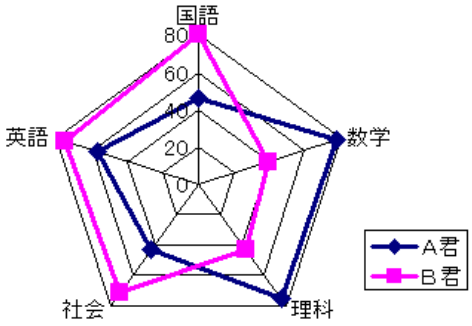


同じグラフを棒グラフにしてみました。数値は全く同じですが、受ける印象は違います。

基本的には数値を読むのが正確に伝える方法ですが、グラフは正確さだけでは表せないプラス要素を持っています。

つまり全体の傾向を掴むことです。

例えば、皆さんは写真の説明はどうされていますか。如何にうまく説明しても個人の感想は入ってきます。『山を背景に男女２人が立っています』と言う簡潔な説明から、『２人は嬉しそうにほほ笑んでいます』。さらに『女性は赤い帽子をかぶり、手には背景に写っている野の花と同じ花を持っています』と人により、利用者の要求度により違ってきます。



対面リーディングでグラフを読む場合も写真を読む要素が少しは入ることによってうまく伝わることもあります。

上記のグラフは１人のグラフですが、左はもう一人追加され、好対照のＡ君・Ｂ君が表されています。

ここでは数値だけではなく、写真を読む要素、つまり、Ａ君は理数に強く、Ｂ君は英･国･社に強いとグラフから読み取れる感想を入れることにより、よりリアルに伝わると思います。

ただ、何事も利用者の希望を優先して下さい。

寄り道・回り道

レポーター：木村（きむら） 謹治（きんじ）

江戸堀　木田

【所在地】　大阪市西区江戸堀1丁目23-31
【TEL】　06-6441-1139
【行き方】　地下鉄四ツ橋線「肥後橋駅」２番出口より西へ徒歩８分
【営業時間】　月～金　11：00～16：30　　土曜日　11：00～14：30
日曜祝日は休み　　麺売り切れ次第終了
【URL】　http://www.hagakure.cc/NewFiles/kida.html

皆さんはうどん派・そば派、それともラーメン派。私はうどん派です。

それぞれ国や地域により匂いがあります。例えば韓国ならキムチの匂い（最近は匂いが薄れたみたいですが）。さて日本の代表する匂いは何と思われますか。僕は出汁の香りではないかと思います。

海外から帰ってきた時に、１番に飛び込むのは駅の立ち食いうどんです。出汁の香り・味で日本に帰ってきた事を実感します。

大阪にには大阪のうどんの旨さはありますが、今回紹介するのは「うどん県」で有名な讃岐うどんです。

「木田」はカウンター席が２列あるだけのこぢんまりとしたお店ですが、店主は讃岐うどんの有名店「梅田はがくれ」にてうどんの修行を積まれたようです。

メニューは冷たいうどん・温かいうどん・カレーうどん・ご飯ものとなっています。店のお勧めは冷たいうどんの「生じょうゆ（600円」です。僕はえび天ぶっかけ（800円）を頼みました。

本場、讃岐に比べれば値段が高めですが、交通費や時間のことを考えればぐっとお得です。

うどんは注文が入ってから茹で上げるので出てくるまでに１０～５分ぐらい待ちます。

うどんは2本ずつ食べるのが木田流。しょうゆは2かけ半。絶対まぜない、2本ずつ食べる、という食べ方の口上はありますが、押し付けはありません。

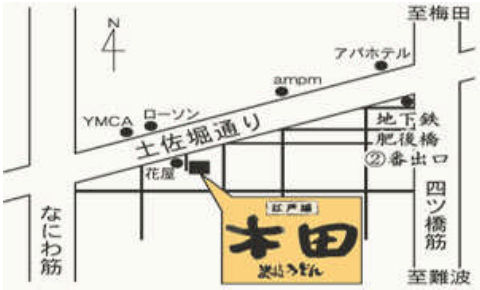
シンプルなうどんを最初はうどんの味そのものを味わい、その後すだちや薬味を入れて違った風味を味わう。それだけのことなのに、ものすごくぜいたくなうどんをいただいた気分になります。

うどんにコシがあるのはもちろんのことさっぱりしてて生じょうゆにぴったり合います。

ぶっかけの出汁はしっかりした味付けで大根おろし、しょうがを混ぜても薄くないし丁度ええ感じ。

また、店主はかやくご飯屋の老舗「大黒」の息子さん。サイドメニューのかやくご飯を回りの人が食べていたのもうなずけます。

次回はかやくご飯にも挑戦したいです。



人と人生

青木 陽子

赤いハートと蒼い月

木村（きむら） 謹治（きんじ）

青木さんのことを知るきっかけとなったのは、劇団往来の「赤いハートと蒼い月」でした。

「障害者だからといって他人と自分に隔たりを作ってはいけない、人と人は真心と真心とでつながるもの、赤いハートさえあれば障害に負けることなく、すばらしい人生が待っている」と説く青木さん。　そして、異国の地で日本語を教える主人公は日本語を教えると同時に日本の風景と日本の心を教える。感動に満ちたミュージカルでした。

青木さんは1961年埼玉県浦和市（現さいたま市）に生まれました。先天性の弱視でしたが予防接種後の後遺症で、６歳の時に失明しました。

筑波大学付属盲学校、南山大学文学部教育学科を経て、８９年に米ニューヨーク州立大バッファロー校修士課程修了。その後ペンシルバニア大学博士課程に進学。93年天津市外国語大学で中国語を学習。「不遇な中国の視覚障害者が、夢をもって生きていく手助けをしたい」と、アジア視覚障害者教育協会を創設。95年天津視覚障害者日本語訓練学校を開校。以来、現地に在住して指導を続け、日本への留学生も輩出していいます。

青木さんが中国でこの学校を開いたきっかけは、１５年ほど前、留学先のアメリカでの何気ない会話からでした。アジアからの留学生と話していると、あることに気が付きました。「台湾や香港からはハンディのある学生も来てるけど、中国本土からは来ていないね」という話になりました。

アメリカに留学した当時はアカデミックな道を歩もうと考えていたそうです。しかし、アジア諸国から留学している学生たちと交流するうちに考えが変わりました。現実離れした象牙の塔の中に身を置くよりも、ダイナミックに変化しつつある中国で、そのプロセスを中から感じてみたいと思いました。「21世紀は中国の時代になる。そこで日中の架け橋になるような人材を育成しよう」そう心に誓ったのです。

当時の中国は改革・開放路線を推進し、大きな変革を遂げていました。一方で視覚障害者の社会的地位は低く、「ダイナミックに変わる大国で、新しい人材を育てたいと思ったんです」と言う。

しかし、これまでの道のりは平たんでありませんでした。開校当初は、その設立の趣旨を理解してもらえなかったり、中国国内で日本人が中国人の障害者に日本語を教えるというボランティアの概念を理解してもらえなかったりと。また、生徒が難関の日本語能力試験に合格するなど実績を上げ始めると、やっかみの声も出ました。

「もう日本に帰ろうか」と何度も思ったそうです。その度、「これまで自分でやりたいと思ったことをあきらめたことはなかった。負けてたまるか」と思いとどまりました。

60坪程度の小さな私学ながら、障害者と

健常者がともに学びあう仲で、お互いを「一人の人間」として受け入れ理解し、助け合い励ましあいながら、各人の能力と人格の向上を目指すという、心をつなぐ教育を掲げ励んできました。以来、４００名を越える学生を受け入れてきました。

しかも、学生が経済的負担になる授業料は一切徴収していません。運営資金は、アジア視覚障害者教育協会に寄せられる会費や寄付金で賄っています。

また、天津市の国営ラジオでのレギュラー番組などを通じて視覚障害者の地位向上につとめられるなど常に困難を克服し、新しい道を切り開いてこられました。

2001年には中国政府が教育・文化などに貢献した外国人に贈る「友誼賞（ゆうぎしょう）」を受賞されるなど、中国国内でもその実績は広く認められています。

日本では04年に「毎日国際交流賞」、10年には「日本政府外務大臣表彰」を受けられるなどのほか多数受賞されています。

「夢がすべての原動力」と言う青木さん。「今までは中国から日本へ留学生を送っていたけど、これからは中国へ、日本やアジア諸国の視覚障害者に学びに来てほしい。アジアの視覚障害者たちが相互交流できお互いの夢を語りあえる、そんな場所を作りたいんです」。彼女の描く夢が新たな夢を生み出す。青木さんを中心に夢の連鎖が広がりつつあります。

2012年には 特定非営利活動法人アジア障害者教育協会を設立し、障害を持つ人にも働ける「サフィーナ上尾（あげお）作業所（埼玉県）」を開所されました。サフィーナとはアラビア語で「船」を意味し、人生の大海原にみんなで力を合わせて漕ぎ出そうという熱い思いが込められています。

青木さんの情熱と努力には頭の下がる思いです。

お断り：以上の内容は、点字毎日、中国国際放送局、人民網日本語版などの情報を参考にさせていただきました。

前号に引き続きグラフの読み方を掲載しました。グラフに限らず絵や図、写真など読み手は原稿を見た上で読み始めます。自分ではわかったつもりにはなりますが、なかなかうまく伝わらないのが現状です。

そこで、家族や知り合いの人に手伝ってもらって練習するのも勉強になります。

相手には原稿を見せないで聞いていただくのです。どれだけ伝わりましたか？　読み方だけでなくご自身の表現力も広がり、一石二鳥かも知れません。（K）

▼屋上へ出るドアがやけに明るいので、覗いて見ると、生駒山から神々しいまでの日の光▼漆黒の闇から、赤味を帯び、やがて厳かな金色の光が現れ、静かに輝きだす。▼60年以上生きてきて初めて我が家から御来迎を見られるのを知りました▼初日の出は見逃しましたが・・・　K

日本ライトハウス 情報文化センター
550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2
06-6441-0015（代表）
06-6441-0039（サービス部）